

現代インドネシアにおけるアズハル大学留学経験者のダイナミズム ——社会的ネットワーク、社会関係資本の観点から——

木下 博子*

はじめに

インドネシアへイスラームが到来して以来、インドネシアのムスリムは交易、巡礼などを通じて中東地域との関係を構築してきた。もちろん、インドネシアのイスラーム諸学発展の歴史においても、当該地域との交流は見逃せないが、現在においてもその紐帯は、留学、巡礼、出稼ぎ労働などあらゆる社会的営為として継続している。

なかでも、16世紀後半から現代に至るまで継続されている知的交流、つまり中東地域への留学行為は、上記の紐帯の端的な例である。現在、カイロのアズハル大学に留学しているインドネシア人学生は5000人近く、毎年数百単位の学生が両地域を往来している。年々その規模は拡大傾向にある。同時に、卒業後のキャリアパスも多様化しており、宗教教育に従事するだけでなく、ジャーナリスト、官僚、イスラーム系社会組織における活動家など、活動の幅を広げている。

これらに鑑みると、アズハル大学出身者は現代インドネシア社会において、特定の社会集団として台頭しつつある存在であるといっても過言ではない。しかし、彼らの社会階層、および社会的地位が多様化しているために、事実、これまで社会において散在した存在であり、集団としてとらえられてこなかった。しかし、彼らこそ現代インドネシアのイスラームを読み解く鍵ではなからうか。つまり、中東地域との知的交流を行う主体に、インドネシアのイスラーム化を促進する要素が隠されていると考えられる。

にもかかわらず、現代のインドネシア・イスラーム研究においては、両地域間の知的営為は等閑視され、現代の中東留学を取り巻くトランスナショナルな動態は、十分に論じられていない。

ゆえに本稿では、現代インドネシア社会における中東留学経験者に着目し、カイロのアズハル大学への留学経験者らが、現代インドネシア社会のイスラーム化にいかなる影響を与えているのかという問題を、社会的ネットワーク論の観点から考察する。焦点を当てるのは、イスラーム高等教育機関の拡張に貢献した知識人らと、在野において出版活動やNGOでの活動を積極的に行っている知識人らである。社会的ネットワーク論を援用することで、既存のインドネシア・イスラーム研究に新たな視座をもたらすことを目的とする。

本稿では、以下の手順に従い議論を展開する。まず、インドネシアのイスラームに関する先行研究を概観した後、本研究の重要な分析ツールとなる社会的ネットワーク論と社会関係資本について代表的な理論を紹介する。次いで、現代カイロにおける留学生らの生活実態を学生組織下での諸活動に着目して考察することによって、カイロに暮らす留学生コミュニティ内での社会的ネットワークの性質を明らかにする。最後に、これらの知識人らのキャリアパスを社会的ネットワーク論の観点から考察することによって、アズハル大学出身の知識人らがインドネシアのイスラーム化に与える影響を把握しうる可能性を示す。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

I. インドネシアのイスラーム研究

本節では、まず中東地域との知的紐帯¹⁾、およびインドネシア・イスラームに関する研究の概観を行うことで、昨今のインドネシア・イスラームの研究動向を考察する。

1. 先行研究

インドネシア・イスラームが中東地域と結んできたトランスナショナルな紐帯に着目した代表的な研究は、アズラ (Azyumardi Azra) の仕事である。アズラは 17 世紀から 18 世紀におけるマレー・インドネシア世界のウラマーと、中東地域とのウラマーとの知的交流を、主にタリーカのスタイルを追究することで明らかにした [Azra 2004]。他方、ラファン (Michael Laffan) は、19 世紀後半から 20 世紀前半にかけてカイロに滞在した留学生らによる出版物、書簡を精査し、これまでオランダ留学を経験した世俗エリートらによって担われてきた、と論じられていたインドネシアの民族意識形成には、カイロへの留学を経験した者らの貢献もあった点を明らかにした [Laffan 2003]。ロフ (William Roff) もラファンと同じく、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけてカイロに暮らしたマレー・インドネシア世界出身の留学生らの雑誌出版活動に着目し、彼らがカイロにおいて祖国インドネシアの独立へ向けていかなる活動を展開たのか、という点を史料を用いて精査している [Roff 1970]。

転じて、現代研究に目をむける。比較的最近の研究として、1980 年代後半のカイロにおけるインドネシア人アズハル大学留学生のコミュニティを人類学的観点から考察したアバザ (Mona Abaza) が挙げられる。アバザはその考察のなかで、留学生コミュニティは伝統主義者・近代主義者に分裂していると結論づけ、二項対立の螺旋から抜け出すことができなかった [Abaza 1994]。その前年にも、インドネシア人アズハル大学出身の知識人に関する小冊子を記しているが、主として知識人らのバイオグラフィー集としての性格が強く感じられる [Abaza 1993]。

次に、上記でも紹介したラファンは、その歴史的観点からの研究の延長線上に、自身がカイロでの短期滞在中に訪問した留学コミュニティの様子を報告している。ラファンは、留学生コミュニティでの聞き取り調査などから、インドネシア人留学生の民族意識について考察している。研究が僅少ななか、2000 年代以降の留学生コミュニティの動態を知る上で非常に有益である [Laffan 2004]。

ここで、現代インドネシア社会におけるイスラームの広がり観点を移す。見市は、インドネシアにおけるイスラーム主義の広がりを思想系譜、政治政党の動き、メディアなど政治活動を中心とした多角的視点から分析をおこなった [見市 2004]。次いで、インドネシア社会におけるイスラーム法学の発展と展開を考察した小林は、イスラーム法学に焦点を絞り、ファトワーや婚姻法にかんするウラマーたちの知的営為を見事に描きだした [小林 2008]。また、倉沢は長期に渡るインドネシアでの現地調査での実体験から、インドネシア・イスラームの多様なあり方を明らかにした [倉沢 2006]。その他、佐々木は、ダンドゥットという宗教歌謡の歌手らの対立と、それに対する大衆からの反応に着目し、スハルト政権崩壊後のインドネシア社会におけるイスラーム復興への大衆の「戸惑い」を描きだした [佐々木 2004]。

まとめると、中東地域との交流を論じた研究はある程度蓄積されているのに対して、現代のイン

1) 巡礼研究では、タリアゴッツォ [Tagliagozzo 2009] など豊富な研究蓄積が確認されるが、本稿では中東留学に代表される知的紐帯のみを考察対象とする。

ドネシア・イスラーム研究においては外部との繋がりを主たる研究対象としたものはみられない。地域研究的観点から、イスラーム化はイスラームの過激化であるという論調を批判し、インドネシア社会のあらゆる場におけるイスラームの緩やかな顕在化の諸相、という点に論点が集中している。

2. 問題点

以上の研究はインドネシア・イスラームへの理解に貢献するものの、次のような問題点をはらんでいると指摘できる。

第1に、中東地域とのトランスナショナルな紐帯への関心が希薄である。前述のとおり、中東地域との関わりに着目した議論は幾つか展開されていたが、インドネシアのイスラームにかんする研究では、両地域との相互交渉に関する視点が欠如しているのである。中東地域との関係は依然重要であるといえる。なぜなら、冒頭でも述べたように、現代の中東地域との諸関係は留学、巡礼、労働移動など多岐に渡っており、なかでも留学経験者は、宗教教育に従事するだけでなく、官公庁や民間において幅広く存在するようになった。換言すると、留学経験者は、インドネシア社会における普遍的存在なのであり、社会集団として台頭しつつある。ゆえに、中東地域とインドネシア間の越境的な営みを分析対象として組み込む必要があると考えられる。

第2に、これまで思想系譜、政治、法学、制度に関する研究は行われてはいるものの、[佐々木 2004]が行ったような、大衆の営みを明らかにする試みが、体系的に行われてきたとは言い難い。つまり、制度として上からのイスラーム化に加えた下からのイスラーム化への視点が欠如しているのである。

以上二点から導出されるのは、中東地域とのトランスナショナルな紐帯とそれに立脚した大衆の営為こそが、インドネシアのイスラーム化を支えている、という仮説である。筆者は、当仮説を実証するために社会的ネットワーク論を用いることが有効であると主張したい。つまり、社会的ネットワーク論の観点から現代インドネシア社会のイスラーム化を捉え直してみるものである。詳細は後述にまわすとして、社会的ネットワーク論とは、集団でなく個人々々を中心に展開し、なおかつ諸機関、諸組織のあいだの関係をも含む広範なネットワークを対象とし、このネットワークを分析することから、人々の意識や行動を説明する。と同時にそこにネットワークを形成し、社会形成の主体としての側面をも捉えるものである[森岡 2000: 27-28]。次節では、本稿での中心的な物差しとなる社会的ネットワーク論、および社会関係資本について、その鍵概念を概観したのち本研究への適応可能性を探り、その研究史と可能性を論じたい。

II. 社会的ネットワーク論の可能性

本節では、インドネシアのイスラーム化の広がり考察する上で有用であると考えられる社会的ネットワーク論の議論を整理する。社会的ネットワーク論は、社会学、人類学、政治学などさまざまな社会科学の分野において用いられている分析手法である。また、社会関係資本にかんしても、同様にコミュニティ・スタディーズ、政治学など幅広いディシプリンのもとで論じられている。ここでは、社会的ネットワーク論、および社会関係資本の鍵概念を概観し、次いで両アプローチが本研究に対していかに援用可能であるかを考察する。

1. 社会的ネットワーク論研究概観

社会ネットワーク論の視座は、これまでいかに援用されてきたのであろうか。ネットワークを分析概念として援用することを初めに提唱したのは、人類学者であるバーンズ[Barnes 1954]による。バーンズは、ノルウェーのある町における教区内の社会階層や住民による自治組織を対象とした研究を行った。所属する組織を超えて個々人が結ぶ人的関係性こそが、教区内の社会階層や自治組織をとりまくダイナミズムを決定する要因であると指摘した[森岡 2006: 229-230]。バーンズの、越境的に取り結ばれる人間関係、つまり住民のネットワークという考えに影響を受けたボット[Bott 1955]は、夫婦間の役割分担を考察した自身の研究において、綿密な聞き取り調査から、夫婦の関係性は夫と妻という孤立した世帯内で形成されるのではなく、夫と妻を取り巻く親族や友人のネットワークから影響を受けていることを明らかにした[野沢 2006: 92]²⁾。このようにバーンズやボットは、社会ネットワークを分析概念として用いた。両者の行った人類学的、社会学的調査は、参与観察や入念な聞き取り調査に基づき、行為者を取り巻く関係の構造に着目した画期的な研究であった。

次いで、転職に関する社会学的調査を行っていたグラノヴェッターは、ホワイトカラー層の転職には、親族や接触頻度の多い「強い紐帯」ではなく接触頻度の比較的少ない、友人の友人といった「弱い紐帯」が有効に作用することを明らかにした[Granovetter 1973]。

安田と野沢が指摘するように、個人の行動は、その人固有の特性（学歴、社会的地位など）から全てを説明することはできず、他者との関係性において、その構造的特性が与える影響を考慮することではじめて、十分な理解につながる[安田 1997; 野沢 2009]。バーンズとボットの研究は、人間関係の構造を視野に入れた点で画期的であり、グラノヴェッターの「弱い紐帯」の強さは、転職にまつわる行為者のネットワークの活用の仕方と、その特徴を浮き彫りにした。

さらに、社会的ネットワークの性質として、近年着目されている2つの概念がある。これらは、ネットワークに内在する性質として理解できるだろう。

第1に、スモール・ワールド・ネットワークとは、ミルグラムが提唱した6次の隔たり³⁾、そしてワッツらが提唱したクラスター（集団、コミュニティ）を併せもったネットワークを指す[増田 2007: 40]。つまり、行為者は、家族関係、職場での上下関係、学生時代の仲間、サークルといったコミュニティに属し、その内部では紐帯が緊密である。行為者がそれぞれ複数のコミュニティに所属し、それによって他者をつなぐ近道が存在することが、6次の隔たりを実現する大きな要因になっているという[増田 2007: 52]。

第2に、スケールフリー・ネットワークとは、多数の人とつながっている人が、少数存在するネットワークであり、こうした多くの人とつながっている人をハブと呼ぶ[増田 2007: 126]。バラバシの言葉を借りれば、ハブとは、人間でいえば、活動分野も社会階層も多様な人々と絶えず接触しているような人物である[バラバシ 2002: 90-91]。

この説明からも分かるように、スモール・ワールド・ネットワークと、スケールフリー・ネットワークは、ハブの存在の有無によって異なる。つまり、ハブは、それが存在するネットワークの構

2) バーンズやボットの研究は、インフォーマルで、なおかつ個人的な関係性に着目した「コミュニアル」な研究であるとの批判がなされた。つまり、彼らの研究は個人を中心として、本人を取り巻く人的関係性を分析するエゴ・セントリックネットワークの研究なのではないか、ということである。その後ホワイトらによって社会的ネットワーク論は構造分析の手法として確立されていく[Scott 1991: 32-33]。

3) 6次の隔たりとは、スタンレー・ミルグラムが1967年に行った相互接続性に関する社会調査である。この世界のどこか遠くの誰かに手紙を届けるためには、平均して約6回の手紙をまわすだけでよいことを明らかにした。つまり、人はただつながっているだけではなくて、たった数回の握手により他の誰とでもつながることができる、ということである[バラバシ 2002: 45-58]。

造を支配し、そのネットワークを「小さな世界」にし、ずば抜けて多数のノードにリンクされたハブは、システム内の任意の2つのノードを短い距離でつなぐ特性を持っているという[バラバシ 2002: 94]。

以上、社会的ネットワーク論における主要な概念を俯瞰した。コミュニティ内部における個々人のネットワークを考察する上で重要である社会関係資本に関して議論を進めたい。

2. 社会関係資本

金光によると、社会関係資本とは、「社会的ネットワーク構築の努力を通じて獲得され、個人や集団にリターン、ベネフィットをもたらすような創発的な関係資産であり……社会的ネットワークへの投資行為による、何らかのリターンの取得という過程」と定義される[金光 2003: 238-239]。

社会関係資本という理論は、社会的ネットワーク論と同様に比較的最近の議論である。以下では、本研究への援用可能性があるいくつかの社会関係資本論を、リン[リン 2001]および金光[金光 2003]によるレビューを参照しながら紹介する。

家族形態と子弟の進学率の関係性を社会的ネットワークの観点から考察した社会学者のコールマン[コールマン 1988]は、後に社会関係資本の体系化を行った。コールマンによると、社会関係資本には、1) アクターが、自己の利益を追求し、何らかの目的を実現させるために社会的ネットワークを利用する側面と、2) コミュニティ内で交わされる閉鎖的な情報と、ある特定の規範の強制施行が可能な社会的ネットワークが、社会関係資本を醸成する側面があると指摘する[コールマン 1988: 215-221; 金光 2003: 239-240]。これに関連して言えば、前述のグラノヴェッターの場合、資源として「弱い紐帯」の動員が転職の成功を左右したと指摘することができる[金光 2003: 245]。

他方、政治学者であるパットナムは、社会関係資本には1) 結束型(Bonding)と2) 橋渡し型(Bridging)型の2種類があり、前者は全ての行為者がお互い知り合いであり、密な関係を構築している場合には、交換される情報の同質性が高まると同時に、同質的な規範や意識の促進が行われると指摘する。その結果、信頼や互酬性の規範が高まるのである。反対に後者の型では、構造的隙間のある社会的ネットワークの場合に多く観察される。つまり、各クラスターにおいて橋渡しをすることの可能な行為者が存在することで、多様な情報が交換され、地位や属性に関わりなく多種多様な行為者との「弱い紐帯」が出現するという[パットナム 1993]。[金光 2003]は、グラノヴェッターの研究で明らかにされた社会関係資本を「資源動員の社会関係資本論」と名付け、行為者が資源として社会的ネットワークを動員することで、さまざまな利益の実現が行われるタイプの資本であると指摘する。また、対照的にパットナムが指摘する社会関係資本を「連帯的社会関係資本論」と命名し、必ずしも社会的ネットワークから派生するものではなく、信頼や規範、連帯性といったものが大きく関係することを指摘している[Lin 2001: 5; 金光 2003: 244-247]。

以上、金光が指摘するように社会関係資本とは、社会的ネットワーク内で行為者が利用する資源であり、なおかつ信頼や連帯性の強化につながったり、情報フローを容易にする効果のある資本である。

3. 社会的ネットワーク論、社会関係資本の可能性

では、以上概観した社会的ネットワーク論と社会関係資本は、本研究にいかなる援用が可能なのだろうか。本節では本研究でネットワーク分析を行ううえでの調査対象に関して言及したのち、先述の諸理論の援用可能性を探る。

まず、社会的ネットワーク論には、個人とその周囲に広がる社会的ネットワークを考察対象とするエゴセントリックネットワークと、企業や国家など個々人の関係を集積した集団間のネットワークを考察対象とするホールネットワーク（ソシオセントリック・ネットワーク）に分けられる〔平松 2010: 68〕。本研究で対象とするのはイスラーム知識人や、ジャーナリストといった個人の行為者である。詳細は後述するが、本研究では前者のエゴセントリックネットワークを分析方法として用い、各個人の周囲にひろがる関係性を考察の対象とする。

これに鑑みると、社会的ネットワーク論は、研究対象の特定の社会階層や社会的地位に限定されることなく、これらの枠組みを超えたアクター同士の繋がりを明らかにすることができる。結果、現代インドネシア社会において、中東地域とのトランスナショナルな紐帯の媒介であり、社会集団でもあるアズハル大学出身者が、社会のイスラーム化に与えるインパクトを効果的に明らかにできる。

より具体的には、研究対象であるアズハル出身者、つまり本研究に引き寄せると、知識人層やジャーナリストといった在野のアズハル出身者らが、個々にどのような社会的ネットワークをもっているのかを明らかにすることができるのである。

そのためには、主として次に挙げる点を明確にしていく必要があるだろう。第1に、現代カイロのインドネシア人アズハル大学留学生のコミュニティ内部では、どのような社会的ネットワークが取り結ばれているのか、という点である。学生時代のコミュニティ内部での学生同士の繋がりを明らかにし、コミュニティの性質を考察することで、帰国後のキャリア形成を左右する要因を発見できると考えられる。第2に、1点目で明らかにした社会的ネットワークの性質を参照しながら、現在インドネシアで活躍するアズハル出身者らが、カイロ留学時代にいかなる性格をもった社会的ネットワークに埋め込まれていたのかという点を明らかにする必要がある。留学していた年代、コミュニティの規模などの諸要因によって、社会的ネットワークの性質は異なる。そのため、出身者らへの聞き取り調査、および回顧録を精査することによって、学生コミュニティ内部の社会的ネットワークの変容をとらえることで、世代ごとの相違を浮き彫りにできる可能性がある。最後に、2点目に関連して、彼らはいかなる社会関係資本に依拠、あるいは資本を動員しながら日々の知的営為を行っているのか、という点に着目する必要がある。つまり、彼らの依拠する社会的ネットワークにおいて、いかなる資源を動員しながら活動を展開しているのかを明らかにできると考えられる。

次節では、上記の問題意識に基づいた試論的考察を行いたい。まず、現代のカイロにおける留学生コミュニティ内部での社会的ネットワーク実態を明らかにするために、事例としてある学生組織内部での活動を取りあげ、論じる。次に、帰国後のアズハル出身者らの諸活動にかんして、国立イスラーム大学の教員、および国内メディアのジャーナリスらを事例としてとりあげ、彼らのネットワークの形態、性質を考察する。

III. 社会的ネットワーク論からみるインドネシア・イスラームの広がり

本節では試論として、現代インドネシア社会におけるアズハル大学出身イスラーム知識人らが形成するイスラーム化のネットワークを考察したい。具体的には、第1に、カイロにおいて学生らが形成するネットワークの実態を明らかにする。第2に、アズハル大学出身の知識人らがインドネシアのイスラーム化に与える影響について、彼らの形成するネットワークに着目して明らかにする。具体的には、イスラーム化の一端を担うイスラーム高等教育の拡張に寄与した者らと、在野において出版、NGOでの活動に従事する者らについて考察を行う。

1. カイロにおける学生生活の実態

1) 留学の背景

まず、カイロでのネットワークを分析する前提として、留学生の生活実態を記述する。具体的には留学の背景について奨学金プログラム、教育的背景、経済状況・住居形態の3点を中心にみておきたい。

多くの学生が、何らかの奨学金プログラムを受給している。アズハル大学とインドネシア宗教省が支給するプログラムと、湾岸諸国のイスラーム関連組織が支給するものの2つに大別される。まず、前者について概観すると1950年代の中盤から支給が開始されたという。支給額は月額200エジプトポンドである。受給するためには在インドネシア・エジプト大使館、およびインドネシア宗教省が実施する試験に合格する必要がある。試験は毎年7月頃開催され、アラビア語能力、クルアーン暗唱の程度、イスラーム諸学に関する知識が問われる。インドネシア宗教省が実施する試験の担当官は、大半がアズハル大学出身者であり、国立イスラーム大学ジャカルタ校の教員である。後者は、1980年代より支給が増加したと言われている。主だった機関はサウジアラビアのイスラーム世界連盟(Rābiṭa al-‘Ālam al-Islāmī)、クウェートのザカートの家(Bayt al-Zakāt)、そしてエジプトのイスラーム最高評議会(al-Majlis al-A‘lā li-l-Shu‘ūn al-Islāmīya)などである。基本的な支給資格は申請者全てである。支給額は月額120エジプトポンドから、50米ドルまで多様であり、試験は実施されない[Kinoshita 2009: 11-12]。

次に留学生らの教育的背景について概観したい。留学生の大半がボンドック・プサントレンという寄宿制のイスラーム学校の出身者である。当教育機関は宗教省の管轄する教育機関であるが、教育カリキュラムなどは基本的に当教育機関を主催するキアイと呼ばれる宗教教師の方針に則っている。

現在、国内の大手ボンドック・プサントレン34校のイジャーザがアズハル大学入学資格と認められているために、多くのボンドック・プサントレン出身の学生らに対してアズハル大学は門戸を開いている[KBRI 2006: 96-102]。

最後に、留学生の経済状況と住居形態をみていく。在カイロ・インドネシア大使館によると、2008年時点でアズハル大学、およびインドネシア宗教省が支給する奨学金を受給しているのは、全留学生のうち35%にとどまっているという。留学生数は5000人近いことから、奨学金受給者は1800人に満たないことが明らかである。他方、他のイスラーム関係組織からの奨学金受給者の数は正確には判明していないという。ならびに、アズハル大学、およびインドネシア宗教省が支給する奨学金を受給する学生には、アズハル大学の提供する学生寮への居住が許可されているが、その数は約1800名程度の学生のうちの10%にすぎない[KBRI 2008: 6-7]。アズハル大学はイスラーム世界の各国から留学生を受け入れているために、学生寮の提供が追いついていないことが現実である。

住居形態は、前述の通りアズハル大学の学生寮に住む者と、カイロ近郊のナスル・シティーで、友人らとアパートの一室で共同生活を営む者に分かれる。後者は、主として同郷者や、同じボンドック・プサントレン出身者らと居住している。

2) 学生組織下における活動——地域的分断——

上記のような背景のもと、留学生らはカイロでの生活を営んでいる。同時に彼らは多くの組織での活動に準じた生活を送っている。まず、学生組織の概要をみた後、次いで学生組織下での生活実

態の事例として、地方組織下での生活実態を考察したい。

現在の留学生コミュニティではインドネシア人学生協会（*Persatuan Pelajar dan Mahasiswa Indonesia, PPMI*）を頂点として種々の組織が結成されている。当学生協会は男子学生が中心となっており、インドネシア人留学生をとりまとめる機関であり、大使館との関係性が強い。また、女子学生が中心となった女子学生組織（*Wihda*）が存在しており、こちらは女子学生をとりまとめている。その他顕著な組織として、地方組織があげられる。当組織は16の下部組織から形成されており、留学生の出身地をもとに形成されている [Kinoshita 2009: 11–12]⁴⁾。

本稿で着目するのは、この地方組織である。大半の留学生が自身の出自に基づいた当該組織に参加しており、諸活動を行っている。その一例として、地方組織のなかでも多くの参加者を擁する東ジャワの事例を中心にみていきたい。東ジャワ組織は1998年に設立されている。

組織下における活動は、「東ジャワ」出身という地域的紐帯を強化することを目的として運営されている。参与観察を通じて同組織下での生活実態調査の結果、学生らはジャワ語で話し、同じ組織内だけの人間関係に終始していることが明らかとなった。つまり、他組織の学生との関わりは希薄である。東ジャワ組織の会長は「当組織での活動を通じて、東ジャワの学生としての連帯を強めたい」と語る。また当組織に参加する学生の一人は、「学生が多すぎて、誰が誰だかわからないんだ。知っている仲間内で過ごす方が居心地がいいよ」と当組織での活動に関して発言した。

このような学生らの認識からも明らかのように、地方組織下では、インドネシアで彼らが営んできた生活が再生産されていると同時に、地方組織という集団に分散しその内部での連帯意識を強化していく傾向にあることが理解できる。

3) 地域的分断の架橋

しかし、全ての学生が地方組織下での閉鎖的生活に終始しているわけではない。主に2つの活動を通じて、地方的分断を架橋している。ジャーナル執筆・編集活動とディスカッション・各種セミナーへの参加である。

インドネシア人学生協会以下の様々な学生組織では、多くが独自に執筆・編集したジャーナルを出版している。現在大使館が把握しているだけでも、20種類程度の定期刊行物がある。こうしたジャーナル執筆・編集活動に参加するのは、ごく一部の学生であり、取材のために多くの著名な知識人らへのインタビューを行ったり、社会問題への高い関心を有している。

次のディスカッション・各種セミナーへの参加も地域的分断を架橋する重要な場となっている。インドネシア人学生協会や女子学生組織が中心となり、多い時には毎日開催されている。その多くが学生らの大半がアカウントを持っているソーシャル・ネットワーキング・サイト（SNS）を通じて広報が行われる。こうした行事へ積極的に参加している学生の一人は次のように語る。

「時間がある時は、なるべくたくさんのセミナーとかワークショップに参加するようにしている（ikut banyak seminar dan lokakarya）。プサントレンで勉強しなかったことが学べるし、他の組織から参加している学生と意見交換するのが楽しみ（enjoy diskusi dengan mahasiswa dari organisasi lain）。それを帰ってから友達に話して、ディスカッションしたりするよ。」⁵⁾

4) 学生組織の概略図に関してはアペンディクスを参照。

5) 2009年3月1日実施の聞き取り調査（カイロ）。

まとめると、このような活動を通じて自身の所属する組織の垣根を越えて、積極的に他者との関係性を構築する学生が一部存在している。こうした越境的行為を行う学生は少数であり、彼らによって様々な情報が組織内にもたらされる。つまり、このような少数の学生は、地方組織という分散した集団の内部での相互交渉に終始する学生らにとって、多くの情報をもたらす結節点であると同時に、多くの人的関係を有する特異な学生であると指摘できる。

これまでの議論をまとめると、現代カイロにおけるインドネシア人アズハル大学留学生の生活実態は以下の2点に要約することができる。

第1に、多くの学生は地方組織という集団に分散し、その内部で彼らがインドネシアで享受してきた生活を再生産している。本稿であつかった事例からも明らかなように、東ジャワ組織に属する学生らは「東ジャワ」という地域性を強化する傾向にあり、他組織との関係性は最小限である。

第2に、大半の学生が閉鎖的な関係性を構築している一方で、他者との関係性を多くもつ学生の存在によって、第1点で述べた地域的分断は架橋されている、ということである。具体的には、これら特異な学生は、ジャーナル執筆・編集活動や各種セミナー、学習会への参加で、つまり構築的営為が行われる場での多くの出会い、知的刺激を得ている。そして、こうした一連の活動を通じて得た多くの情報を自身の所属する組織にもたらし広めることで、彼ら特異な学生につながる他の学生らにも、外部の情報が伝達されるのである。

まとめると、上記のような組織の隔たりに左右されない越境的な学生らによって、インドネシア国内の各々の地域内ネットワークが形成され、さらには地域内の人的ネットワークの確立につながっているのである。

しかし、今後さらに精度を高めていくためには、地方組織内でのネットワークと、地方組織ごとをそれぞれつなぐネットワークの双方に着目していかなければならない。具体的には、以下の2点を着目する必要があるだろう。

第1に、地方組織内のネットワークの特性を、質問票を用いた調査によって析出する必要がある。事実、参与観察や聞き取り調査で得られたように、一部の学生が、特別多くの交友関係を外部に構築し、積極的に外部から情報を持ち込む「ハブ」となっているとする結論をさらに説得的に提示するには、「ハブ」であることが予測される学生らが実際にどの程度の交友関係をもっているのか、その具体的数値を示すことも肝要であろう。

第2に、これまでの筆者の研究では、多くの交友関係を維持する特異な学生らが、各地方組織間を越境する媒体であることを指摘した。しかし、「ハブ」が必ずしも分断を橋渡しする者ではない可能性が指摘されている [増田 2007: 189-194]。つまり、所与のネットワークごとを媒介する役割をもつ媒介中心性を考慮する必要性がある。具体的には、各組織の橋渡し役をしているのは、一体誰なのかを明らかにすることで、「ハブ」学生のみによる分断の架橋か、あるいは「ハブ」学生とは別個に存在する、橋渡しに長けた学生の存在もあるのか、という点が理解できるであろう。

以上のように、現代カイロに暮らすインドネシア人アズハル大学留学生は閉鎖的なネットワーク下での生活に終始しているが、「ハブ」学生の存在によって、多様な情報を入手することが可能なネットワークを形成していることが明らかとなった。

2. インドネシア社会におけるアズハル大学出身知識人らのネットワーク

では、帰国後、彼らはいかなるキャリアパスを進んでいるのか。そして、そのキャリアがインドネシアのイスラーム化の拡張にいかなる影響を与えているのだろうか。本項では、イスラーム高等

教育の拡張と、在野における出版、NGO 活動に従事するアズハル大学出身者が、いかなるネットワークに基づいてそのキャリアを築いているのかという点をバイオグラフィーをもとに考察する。

1) イスラーム高等教育の拡張

本項の前半部でとりあげるアズハル出身者らが諸活動を行うイスラーム高等教育機関の発展について簡潔にみていく。イスラーム高等教育機関の設立は、独立以前にまで遡る。しかし、イスラーム高等教育機関が実際に制度化されたのは、スカルノ体制下であった。ムスリム子弟へ高等教育の提供によって、ボンドック・プサントレン出身の子弟に対しても高等教育への門戸が開かれた。本稿ではインドネシアにおけるイスラーム高等教育機関の設立に関しての背景は割愛するが、中東留学経験のあるイスラーム知識人がその設立に深く関わっていたことは明らかである [Dhofier 1992; Abaza 1993]。

現在インドネシア全土に 51 校のイスラーム高等教育機関が設立されているが、なかでもジャカルタの国立イスラーム大学は、これらのイスラーム高等教育機関のなかでは代表格として位置づけられる。当教育機関においては、80 年代中盤から時の宗教大臣であったムクティ・アリーや次のムナウィル・シャザリ、そして学長であったハルン・ナスティオンらの手によって、教育カリキュラムの刷新が行われてきた。具体的には経験的学問の導入により、比較宗教学を導入した。また、多くの若手教員を西洋の大学へ留学させることで、教員の質の向上を図った [中村 1994: 280–283; Gillet 1989: 25–29]。

他方、1970 年代後半から、中東諸国との関係性も維持されてきた。例えばサウジアラビアの大学に一定数の教員を留学させ、アラビア語能力の向上をはかるプログラム施行などである [Meuleman 2000: 46]。また、2000 年には、アズハル大学出身の在カイロ・インドネシア大使、教育部公使、大使館スタッフ、そして国立イスラーム大学ジャカルタ校の教員らの尽力によって、アズハル大学との直接提携を結んだ学部であるイスラーム学部 (Fakultas Dirasat Islamiyah) が設立された。当該学部創設にかかわったのは、いずれもアズハル留学経験者であった。以下では、関係当局および留学経験者への聞き取り調査、および資料解析の過程で言及頻度の多かった 3 名の関係者を取り上げ、その略歴を記述する。

M (以下同様) は、1950 年に西スマトラに生まれた。ボンドック・プサントレンで教育を受けた後、国内のイスラーム高等教育機関で学士号を取得している。1980 年アズハル大学神学部の修士課程に進んだが、その後にカイロ大学へと移った。翌年 1981 年から大使館の現地スタッフとして、2000 年まで勤務する。その間スーダンのハルツーム大学で博士号を取得している。大使館職員であった機関は、巡礼ガイド⁶⁾ や学生組織の顧問を務めていたという。その後 2002 年にイスラーム学部が設立されると、学部長の座についた。カイロではアズハル大学とインドネシア宗教省で、イスラーム学部設立にむけた約款締結に貢献したという⁷⁾。

次に S である。S は、1961 年にジャカルタで生まれ、ボンドック・プサントレンで教育を受けた。その後高校レベルからカイロへ渡りアズハル高校に学んだ。その後 1981 年、アズハル大学教育学部に入學、その後同学部の博士課程まで進み 2000 年に博士号を取得した。S は、学部卒業後の 1985 年から 1992 年まで大使館の現地スタッフとして勤務した。学部時代はインドネシア人学生

6) 巡礼ガイドとして、サウジアラビアで就労するためには、各地方組織からの推薦やアラビア語能力などを考慮してジェッダのインドネシア領事館が決定する。ガイドは学生にも関わらず巡礼を経験できること、そしてガイドに足るだけのアラビア語能力があるとみなされることから、学生コミュニティの間での地位が高まる。

7) 2008 年 8 月 21 日実施の聞き取り調査に基づく (ジャカルタ)。

協会の書記を務めたり、ナフダトゥル・ウラマーやムハマディアといった組織において顧問を務めていた。多くの学生のメンターとして、効果的な勉強方法、日常生活の悩みなどの相談にのっていたという。その他巡礼ガイドを数回経験している。博士号取得後は、イスラーム学部で教員として着任した⁸⁾。

最後に、Hである。Hは1971年にジャカルタに生まれた後、東ジャワのボンドック・プサントレン・ゴントールで学んだ。その後クルアーン暗唱プサントレンで学び、クルアーンを暗唱後1992年にアズハル大学神学部に入學、その後2002年に同博士課程に進学し、2006年に博士号を取得した。学生当時はインドネシア人学生協会において自主的に多くのセミナーを主催し、同時にナフダトゥル・ウラマーにおいて積極的にジャーナル出版活動を行っていたという。また巡礼ガイドも務めていた。その博士号を取得した後に、イスラーム学部の教員として着任した。その他国立クルアーン研究所の所長も務めている⁹⁾。

では、彼らのカイロにおける接点に目を向けてみる。M、Sともに大使館職員として勤務していた経験があり、同時にムハマディアの顧問も務めていた。そして、3名とも巡礼ガイドとしてマッカへ赴いているSとHは、ともにナフダトゥル・ウラマーで同時期に活動を行っていたという。

以上のことから、彼らは勉強会の開催を通じて、他の学生らに対して積極的な学習機会を提供すると同時に、刊行物の編集・出版に従事するなど、留学生のあいだで中心的な役割を果たしていたと指摘できる。特にMは修士課程からの留学で、留学当時すでに年長であった。またSは高校時代からアズハル大学に留学しており、カイロ滞在年数が非常に長い。そしてHは留学以前にクルアーンを暗唱を終えており、それぞれが「ハブ」学生になる要素は持ち得ている。その他、マスリ氏はインタビューにおいて、カイロ留学時に知り合ったSとH双方に教員として着任してくれるよう要請したという。つまり、彼らのキャリアは留学時代に構築した人的ネットワークに依拠しているといえる。

2) 在野における出版、NGO 活動

次に、在野において出版社やNGOでの活動に従事するアズハル大学出身知識人の事例をみていきたい。近年、インドネシアではイスラーム系の書籍がシェアを大きく伸ばしている。これらの書籍の多くがアラビア語からの翻訳であり、市場の拡大は著しい。特に、女性の社会における役割、など実生活に則した書籍の売り上げが好調である[見市 2004: 147-149]。つまり、イスラーム系の書籍の市場拡大は、アラビア語読解能力のない一般のムスリムにとっても、イスラームを学ぶことのできる重要な媒体となっているのである。

ここでは、イスラーム出版の流通に関する調査において、多くの関係者から名前のあがった3名のアズハル大学出身者をとりあげる。

第1にZは1977年にマドゥラに生まれた。その後ボンドック・プサントレンで教育を受けた後1995年にアズハル大学神学部に入學する。カイロでは、地方組織であるマドゥラに参加すると同時にナフダトゥル・ウラマーにも所属していたZによると、留学生活の大半は読書とジャーナル執筆活動に費やしたという。学部2回生の1997年から卒業する2000年まで、ナフダトゥル・ウラマー系のジャーナルに積極的に寄稿し、同時に編集委員も務めていた。また、大使館が主催した論文コンテストで第1位(1998年)を獲得、インドネシア学生協会主催の論文コンテストでも第1位を

8) 2008年8月20日実施の聞き取り調査に基づく(ジャカルタ)。

9) 2008年8月15日実施の聞き取り調査に基づく(ジャカルタ)。

獲得する（2000年）。帰国後は、自身で NGO を立ち上げ、特にポンドック・プサントレンの子弟に対して、穏健なイスラームの普及を行っている¹⁰⁾。また同時に精力的な執筆活動を行っており、これまでに多くの本を出版している。

第2に、A である。A は 1976 年に中部ジャワのスマランで生まれた。その後ポンドック・プサントレンで教育を受けた後、1997 年にアズハル大学情報学部に入學する。在學当時は地方組織の中部ジャワに所属し、同時にナフダトゥル・ウラマーでも活動を行っていた。同時にジャーナル出版、学習会へも積極的に参加していたという。A は、カイロでの生活を次のように振り返る。

「僕がカイロに住んでいた時は、ほとんどの学生が自分の地域に閉じこもっていた。自分の方言で喋って（*bicara bahasa daerah*）、同じ地方出身（ジャワ）の学生と暮らして（*tinggal dengan mahasiswa dari Java*）、他のインドネシア人と友達になろうともしない。アラビア語も上手じゃなかった（*bahasa Arab...tidak bagus*）。ほとんどの学生がそうだった。」¹¹⁾

2002 年の帰国後は一時的にソロの出版社において翻訳マネージャーを務めていたが、その後 2008 年にジャカルタのイスラーム系出版社において販売部の部長に就任した。現在では当出版社の商品に対する販売促進活動のために多くのイベントを企画・開催している。

第3に N は、1975 年リアウに生まれる。ポンドック・プサントレンで教育を受け、1997 年アズハル大学神学部に入學する。当時は地方組織のリアウ、およびナフダトゥル・ウラマーに所属していた。2000 年から 1 年間インドネシア人学生協会会長を務めた。その他、積極的な執筆活動を行っており、ナフダトゥル・ウラマー系の雑誌主催の論文コンテストの中東情勢部門において優勝経験がある（2000年）。また自身の出身地であるリアウの地方紙のコレスポンデントとして、定期的に記事を送っていたという。帰国後は、インドネシア大学の社会学部で修士号を取得し、現在 JIL（*Jaringan Islam Liberal*）という団体においてプログラム・コーディネータを務めると同時に、パラマディナ大学でイスラーム哲学を教えている¹²⁾。

彼らは 3 名とも出身地が異なっていたが、カイロのナフダトゥル・ウラマーでの活動を通じて互いに親交を深めた。また彼らに共通しているのは、留学中に積極的に出版活動に従事していたという点である。所属する地方組織は異なるが、ナフダトゥル・ウラマーでのジャーナル出版活動によって、「ハブ」学生として生活を営んでいたことが予測される。

現在、3 名はそれぞれ NGO 主催者、イスラーム系出版社勤務、NGO 勤務という異なるキャリアパスを歩んでいる。しかし、彼らはそれぞれの活動を行う上で、次のような人的ネットワークに依拠している。A は、自身が行う出版物の販売イベントにおいて、Z を招き、このことが集客に貢献している。また Z は、こうしたイベントへの参加は、多くの出版社関係の人物との出会いの場になっており、同時に自身の主催する NGO の活動を広く普及するきっかけになると考える。また、JIL という NGO においてプログラム・コーディネータを務める N は、自身が主催する公開討論会に Z をディスカッサントとして招いているという。

以上要約すると、在野における出版、NGO 活動に従事するアズハル大学出身の若手知識人らは、カイロで構築したネットワークに依拠しながら活動の幅を拡大していると考えられる。

10) 2009 年 8 月 7 日実施の聞き取り調査に基づく（ジャカルタ）。

11) 2009 年 8 月 8 日実施の聞き取り調査に基づく（ジャカルタ）。

12) 2009 年 8 月 4 日実施の聞き取り調査に基づく（ジャカルタ）。

むすびにかえて

本稿では、中東地域とのトランスナショナルな関係とそれに立脚した大衆の営為こそが、インドネシアのイスラーム化を支えている、という仮説に基づき、現代インドネシア社会におけるイスラーム化を草の根の視点から明らかにするために、社会的ネットワーク論に基づいた考察を行った。具体的には、イスラーム化の一端を担うイスラーム高等教育機関と、イスラーム出版の分野におけるアズハル大学出身の知識人らのネットワークに着目した。これまで社会的ネットワーク分析は、社会科学系の多くのディシプリンで取り入れられており、新たな知見を提供している。本稿は、その社会的ネットワーク論が地域研究においても有効であることを論じてきた。

事例の前半において取り上げた3名はいずれも留学時代、学習会の開催、巡礼ガイド経験、そして各イスラーム系組織の顧問を務めるなど、学生の間で中心的な役割を享受していた人物であった。同時に、3名は上記の活動をつうじて長期に渡る交友関係を築いていた。これに基づき、国立イスラーム大学ジャカルタ校のイスラーム学部設立の際には、カイロで築いた人的ネットワークに依拠する人事が行われた。

事例の後半にとりあげたイスラーム出版に従事する3名は、上記の教育従事者らと同じく、留学時代には学生協会で主要なポストに就いたり、定期刊行物の編集・出版などを共同で行っていた。このことから、当時の学生コミュニティではそれぞれが中心的な人物であったと指摘できる。帰国後、生活基盤にするキャリアは異なってはいるものの、留学時代に構築したネットワークを活用してイスラーム出版の分野で活動を行っている。

以上をまとめると、イスラーム高等教育とイスラーム出版において、アズハル大学留学時代に構築した人的ネットワークに依拠しながら現代インドネシア社会におけるイスラーム化を目指しているのである。換言すれば、アズハル大学留学がなければ、現在互いに享受している職位や活動を展開することは不可能であったのだ。

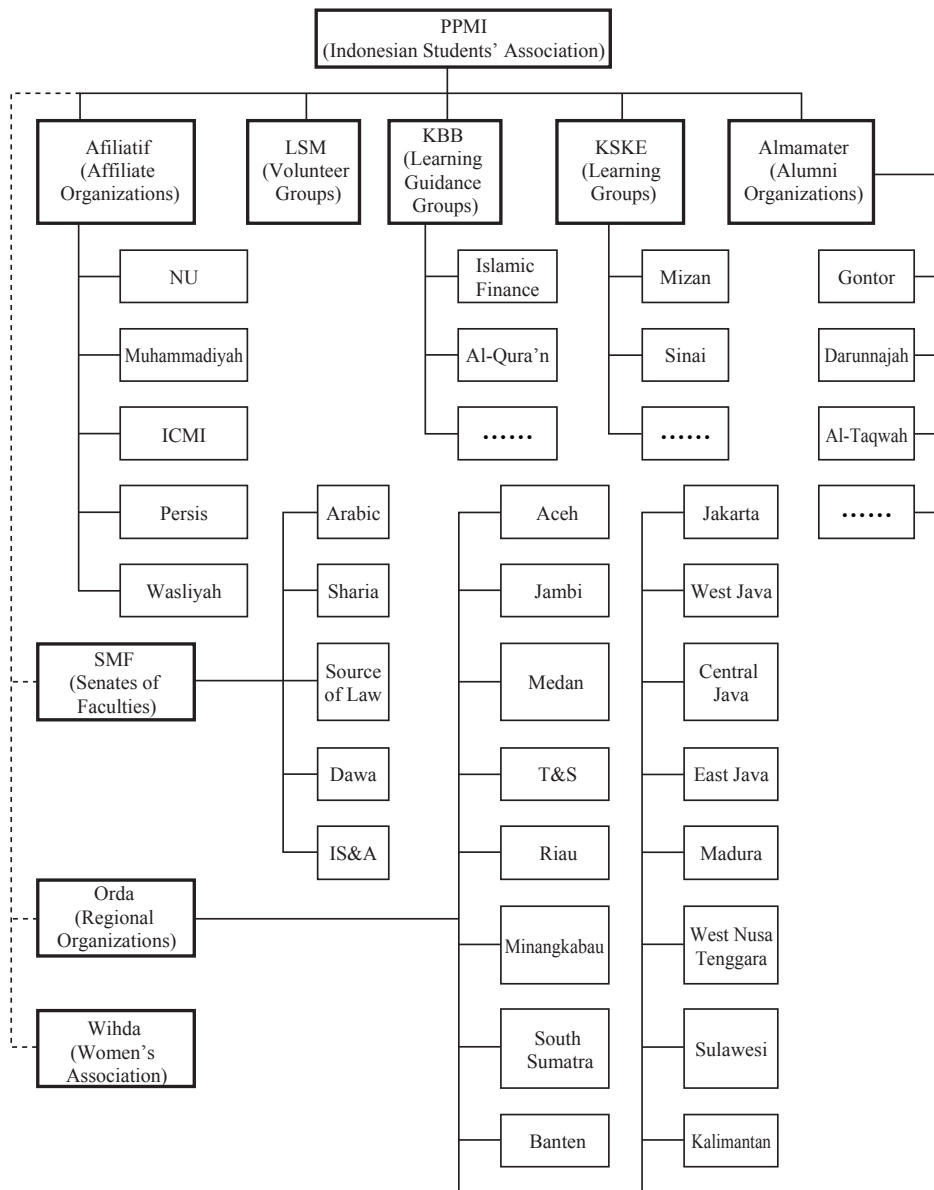
他方、アズハル大学出身の知識人らが構築するネットワークは幾つかの種類があることが予想される。例えば、旅行業やボンドック・プサントレンという在野の教育現場におけるネットワークの存在である。本稿で扱ったのは、イスラーム高等教育機関に従事する者らのネットワークと、在野において出版活動やNGOでの活動を行う者らのネットワークの2つであった。カイロでは前者が、大使館スタッフとしての就労、巡礼ガイド経験、学習会の開催を積極的に行っていたことに対して、後者は、ジャーナル出版活動に特化した活動を展開していたことから、個々のネットワークが固有の特徴をもっていることは予測できる。今後は、本稿で扱ったネットワークの実証的考察を急ぐとともに、その他のネットワークを抽出し比較を行う。これによってそれぞれのネットワークが、現代インドネシア社会のイスラーム化にどのような関わりを持っているのか、という点を調べていくことが喫緊の課題であるといえよう。

最後に、これらの課題に取り組む上で効果的であると考えられる調査方法に関して附言しておく。今後は質問票を用いた聞き取り調査と現地調査が肝要であるとする。まず、質問票に関してはパーソナル・ネットワークを解明することを目的として、それぞれの分野における知人を挙げてもらう。次いで知人の素性、社会的背景などの個人データを収集することによって、個人とその周辺の人物らとの関係を明らかにしていく。その後、質問票に基づいてさらなる聞き取り調査を行うことによって、本稿で扱った、イスラーム高等教育機関の設立、あるいはイスラーム出版業界におけるアズハル大学出身の知識人らのネットワークが解明できると考えられる¹³⁾。

13) パーソナル・ネットワークを解明するためのデータ収集に関しては[安田 1997; 平松ほか 2010]を参照。

Appendix

図表 1：インドネシア人学生組織の概略図



出典：[KBRI 2006] をもとに筆者作成

参考文献

日本語文献

- アルバート＝ラズロ・バラバシ 2002『新ネットワーク思考——世界のしくみを読み解く』(青木薫訳) NHK 出版.
- 倉沢愛子 2006『インドネシア——イスラームの覚醒』洋泉社.
- 小林寧子 2008『インドネシア——展開するイスラーム』名古屋大学出版会.
- 佐々木拓雄 2004「戸惑いの時代と『イヌル現象』——大衆文化の観点からみたインドネシア・ムスリム社会の動態」『東南アジア研究』42(2), pp.208–230.
- ジェームズ, コールマン 1988「人的資本の形成における社会関係資本」(金光淳訳) 野沢慎治(編)『リーディングス ネットワーク論——家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房 pp.205–242.
- 中村光男 1994「インドネシアにおける新中間層の形成とイスラームの主流化——ムスリム知識人協会結成の社会的背景」萩原宜之(編)『講座現代アジア3 民主化と経済発展』pp.271–306.
- 野沢慎治(編) 2002『リーディングス ネットワーク論——家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房.
- 平松閣ほか(編) 2010『社会ネットワークのリサーチ・メソッド——「つながり」を調査する』ミネルヴァ書房.
- 増田直紀 2007『私たちはどうつながっているのか——ネットワークの科学を応用する』中公新書.
- 見市建 2004『インドネシア——イスラーム主義のゆくえ』平凡社.
- 森岡清志 2000『都市社会の人間関係』放送大学教育振興会.
- 安田雪 1997『ワードマップ ネットワーク分析——何が行為を決定するか』新曜社.
- ロバート, バットナム 1993『哲学する民主主義——伝統と改革の市民的構造』(河田潤一訳) NTT 出版.

外国語文献

- Abaza, Mona. 1993. *Changing Images of Three Generations of Azharites in Indonesia*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.
- . 1994. *Indonesian Students in Cairo: Islamic Education Perceptions and Exchange*. Cahier d'Archipel.
- Azra, Azyumardi. 2004. *The Origins of Islamic Reformism in Southeast Asia: Networks of Malay-Indonesian and Middle Eastern 'Ulama in the Seventeenth and Eighteenth Centuries*. Hawai'i: University of Hawai'i Press.
- Barnes, John. 1954. "Class and Committees in a Norwegian Island Parish," *Human Relations* 7, pp.39–58.
- Bott, Elizabeth. 1955. "Urban Families: Conjugal Roles and Social Networks," *Human Relations* 8, pp.345–384.
- Dhofier, Zamakhsyari. 1982. *The Pesantren Tradition: The Role of the Kyai in the Maintenance of Traditional Islam in Java*. Arizona: Arizona State University.
- Gillet, Margaret, "The IAIN Indonesian Higher Education," *Muslim Education Quarterly* 8, pp.21–32.
- Granovetter, Mark. 1973. "The Strength of Weak Ties," *American Journal of Sociology* 78, pp.1360–1380.
- KBRI. 2006. *Informasi Pendidikan di Mesir*. Cairo: Kedutaan Besar Republik Indonesia.
- . 2008. *Dukungan Terhadap Peningkatan Prestasi Mahasiswa Indonesia di Mesir*, Paper Presented at 24–25 March 2008 at al-Azhar conference center in Cairo, pp.1–26.

- Kinoshita Hiroko. 2009. *Islamic Higher Education in Contemporary Indonesia: Through the Islamic Intellectuals of al-Azhar Alumni*. GCOE Working Paper Kyoto University, pp. 1–27.
- Laffan, Michael. 2003. *Islamic Nationhood and Colonial Indonesia: The Umma below the Winds*. London and New York: Routledge Curzon.
- . 2004. “An Indonesian Community in Cairo: Continuity and Change in a Cosmopolitan Islamic Milieu,” *Indonesia* 77, pp. 1–26.
- Lin, Nan. 2001. “Building a Network Theory of Social Capital,” in Nan Lin, K Cook & Burt (eds.), *Social Capital: Theory and Research*, New York: Aldine De Gruyter, pp. 3–29.
- Meuleman, Johan. 2000. “IAIN di Persimpangan Jalan,” Komaruddin Hidayat & Hendro Prasetyo (eds.), *Problem dan Prospek IAIN: Anthologi Pendidikan Tinggi Islam*, Jakarta: Departmen Agama RI, pp. 41–60.
- Milgram, Stanley. 1967. “The Small-World Problem,” *Psychology Today* 1, pp. 61–67.
- Roff, William. 1970. “Indonesian and Malay Students in Cairo in the 1920’s,” *Indonesia* 9, pp. 73–87.
- Scott, John. 2001. *Social Network Analysis: A Handbook Second Edition*. Los Angeles & London: SAGE Publication.
- Snouck, Hurgronje. 1931. *Mekka: In the Later Part of Nineteenth Century*. J. H. Monahan (trs.), Leyden: Brill.
- Tagliacozzo, Eric (ed.). 2009. *Southeast Asia and the Middle East: Islam, Movement, and the Longue Durée*. California: Stanford University Press.
- Wellman, Barry. 1979. “The Community Question: The Intimate Networks of East Yorkers,” *American Journal of Sociology* 84, pp. 1201–1231.